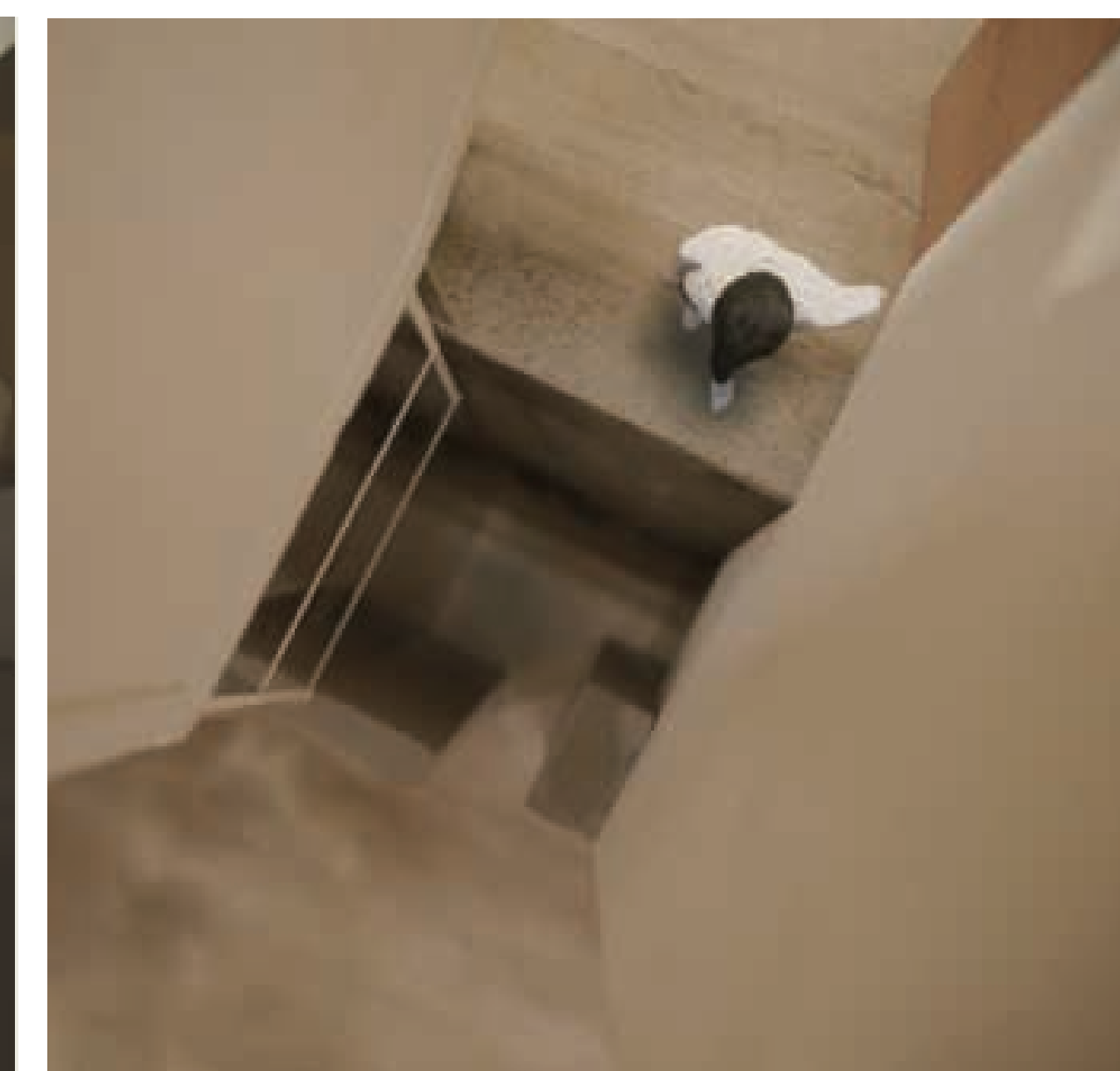






擁壁と住宅の隙間。

そこは日が当たらない、暗くてじめじめした空間でした。

面する窓はとても閉鎖的で、

地面にはごみが転がっています。

敷地は北区十条。

宅地化により、かつての自然の姿とは

かけ離れてしまいましたが、

これが、東京という都市が住宅に覆われ

変遷していく過程で生まれた、

「現在の自然」の姿なのではないかと考えます。

一見ネガティブに思われる擁壁も

実はとてもポジティブな存在なのではないでしょうか。



目まぐるしく進化する街、
東京に広がる擁壁が織りなす風景。
それは変遷を繰り返した末、徐々に成立した

「現在の自然」の姿である。

東京という都市がもつ重要な文脈の1つとして、

その価値を改めて認識するとともに

かつての自然のように

ポジティブな存在として受け止めていく。



D I A G R A M 1

負の価値として存在する擁壁と
住宅の間の隙間を内部化する。

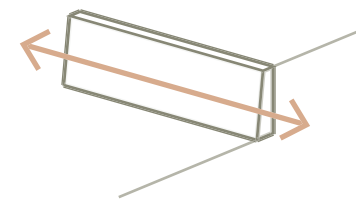


内部に取り込んだ擁壁は住宅の内壁とする。

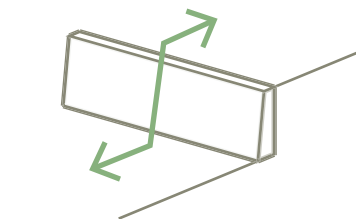


D I A G R A M 2

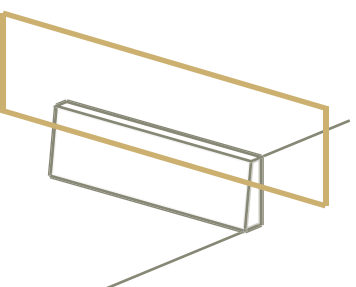
連 続 性



境 界 性



透 明 性



擁壁が持つ性質

擁壁に新たに加える性質

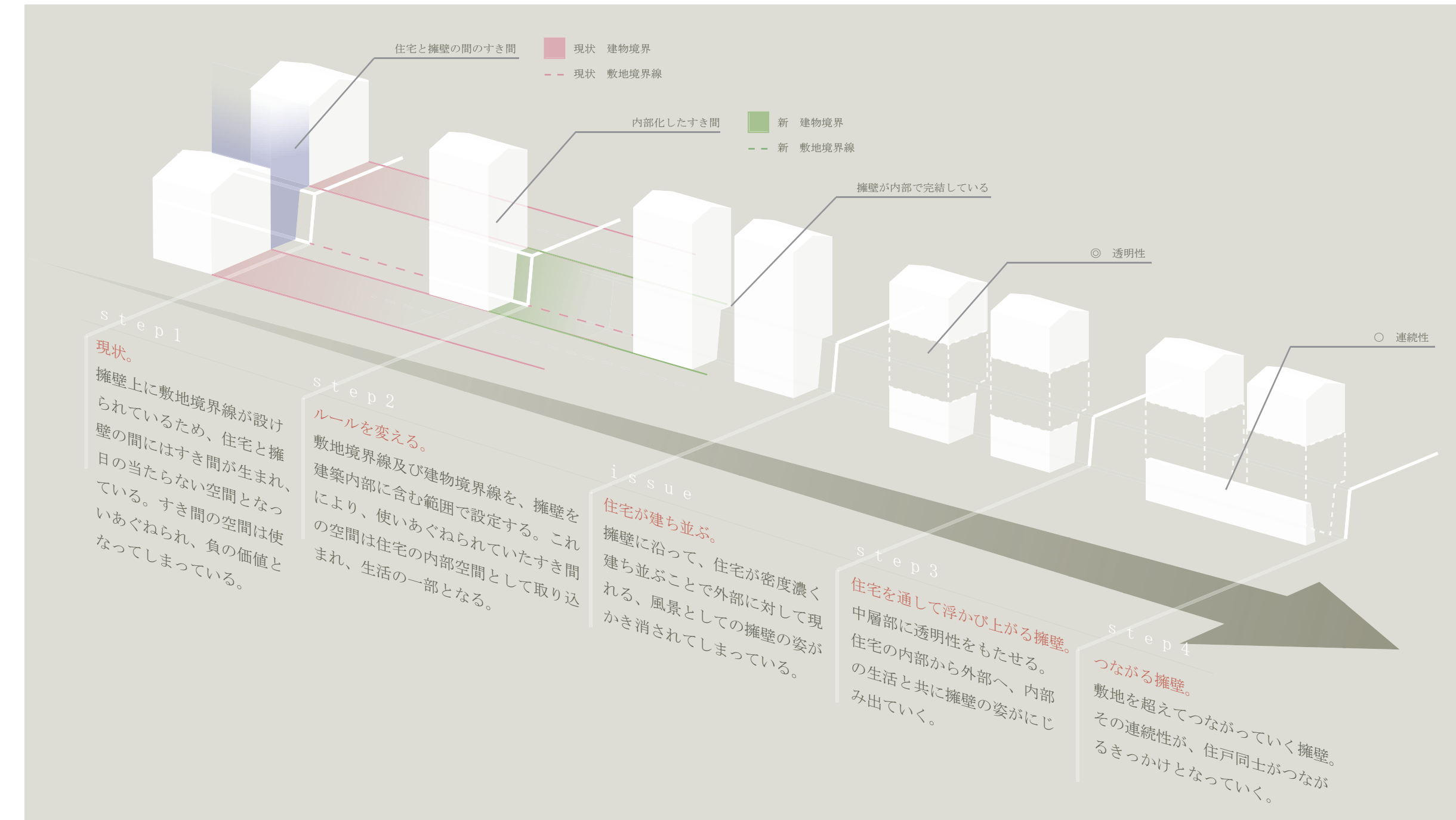
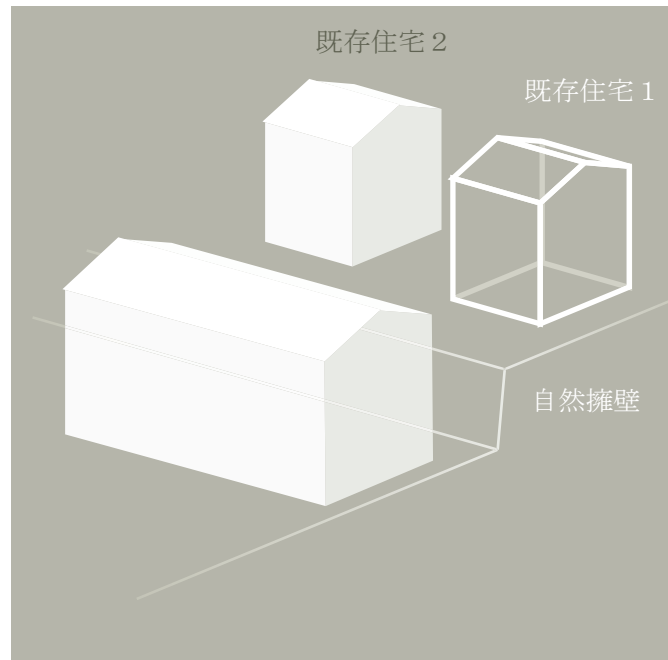
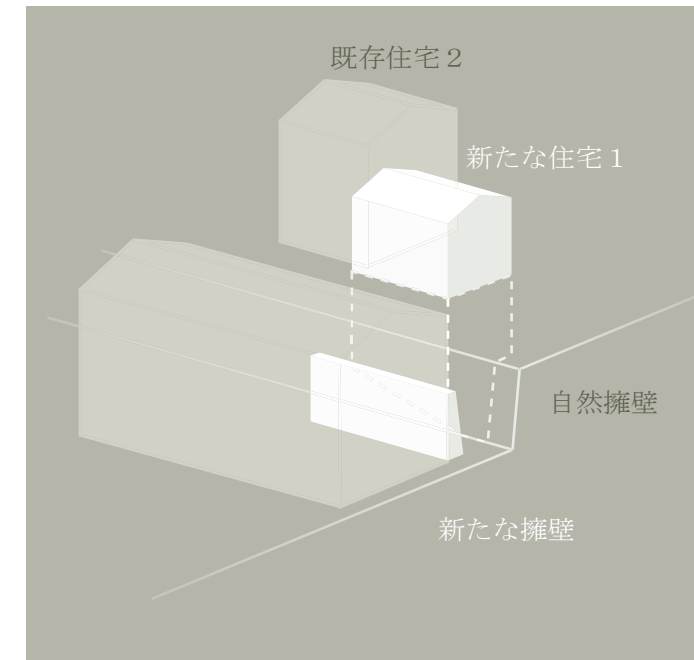


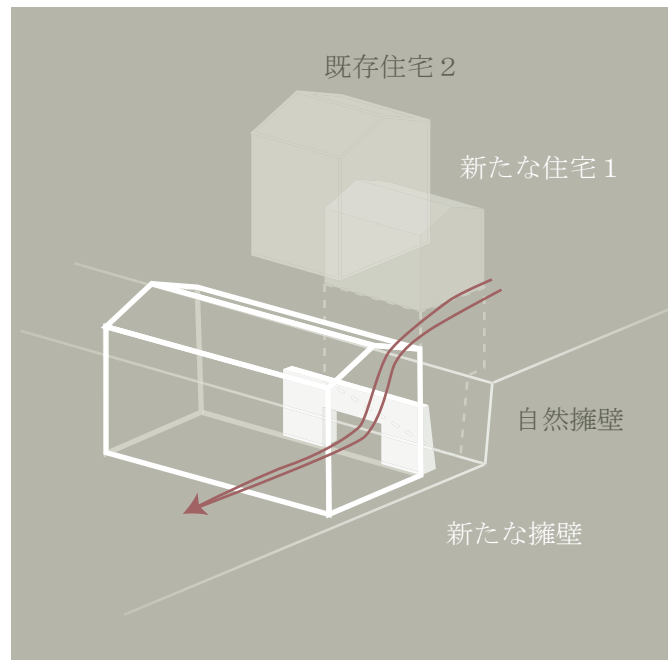
DIAGRAM 3



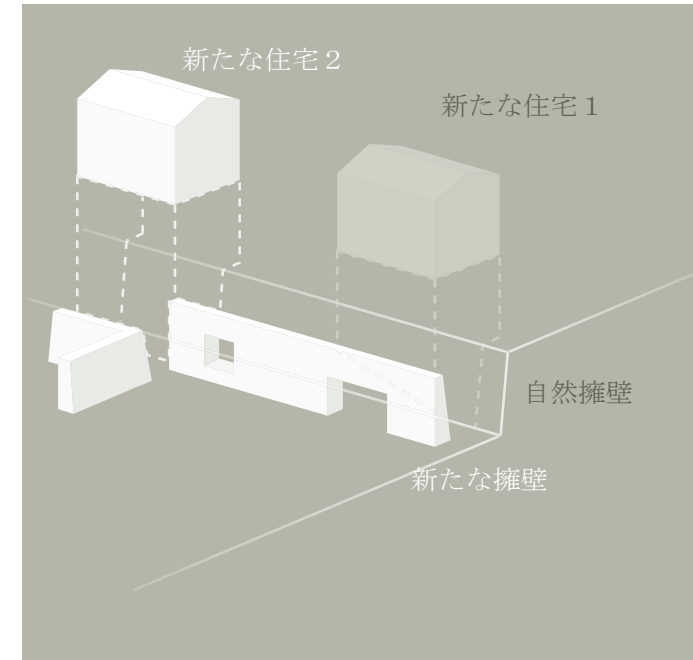
既存の住宅 1 が取り壊される



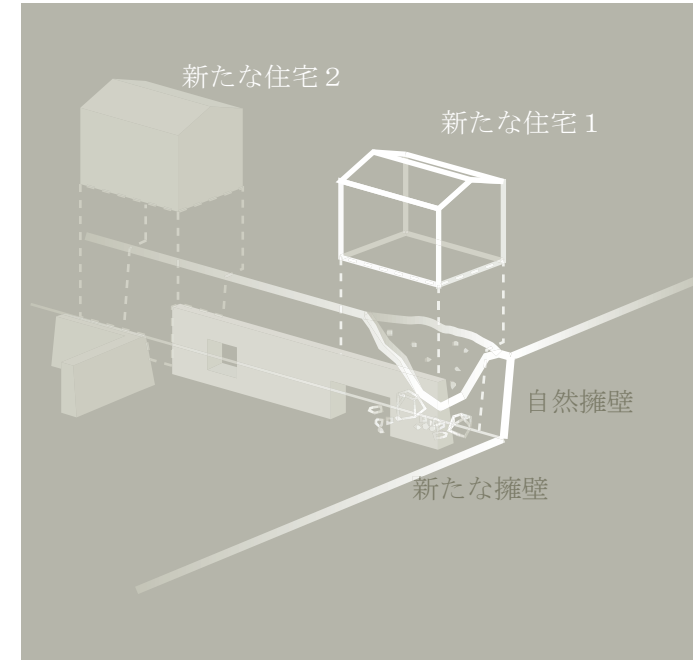
新たな住宅 1 が建つ。
擁壁を取り込んだ、
新たな敷地境界・建物境界のルールを適用する。



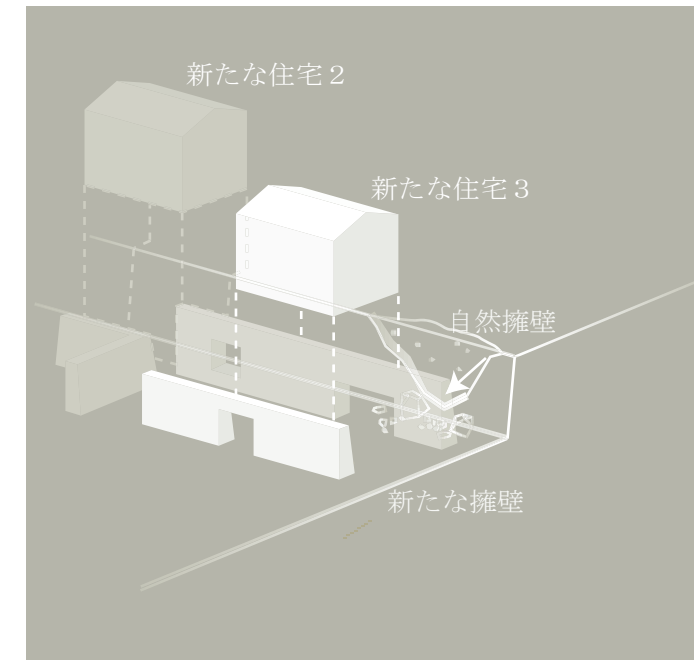
新たな住宅 1 の隣の住宅が取り壊される
上下の流れが生まれる。
擁壁に沿う空間に広がりが生まれる。



既存住宅 2 が取り壊される。
新たな住宅 2 が建てられ、
住宅 1 ・ 2 の間では、空間が連続している。



新たな住宅 1 が取り壊される。
管理されなくなった自然擁壁は風化し、
くずれていく。



かつて新たな擁壁だったものが自然擁壁となる。
またさらに新たな擁壁を用い、住宅を建てる。



P L A N
GL+1000 plan



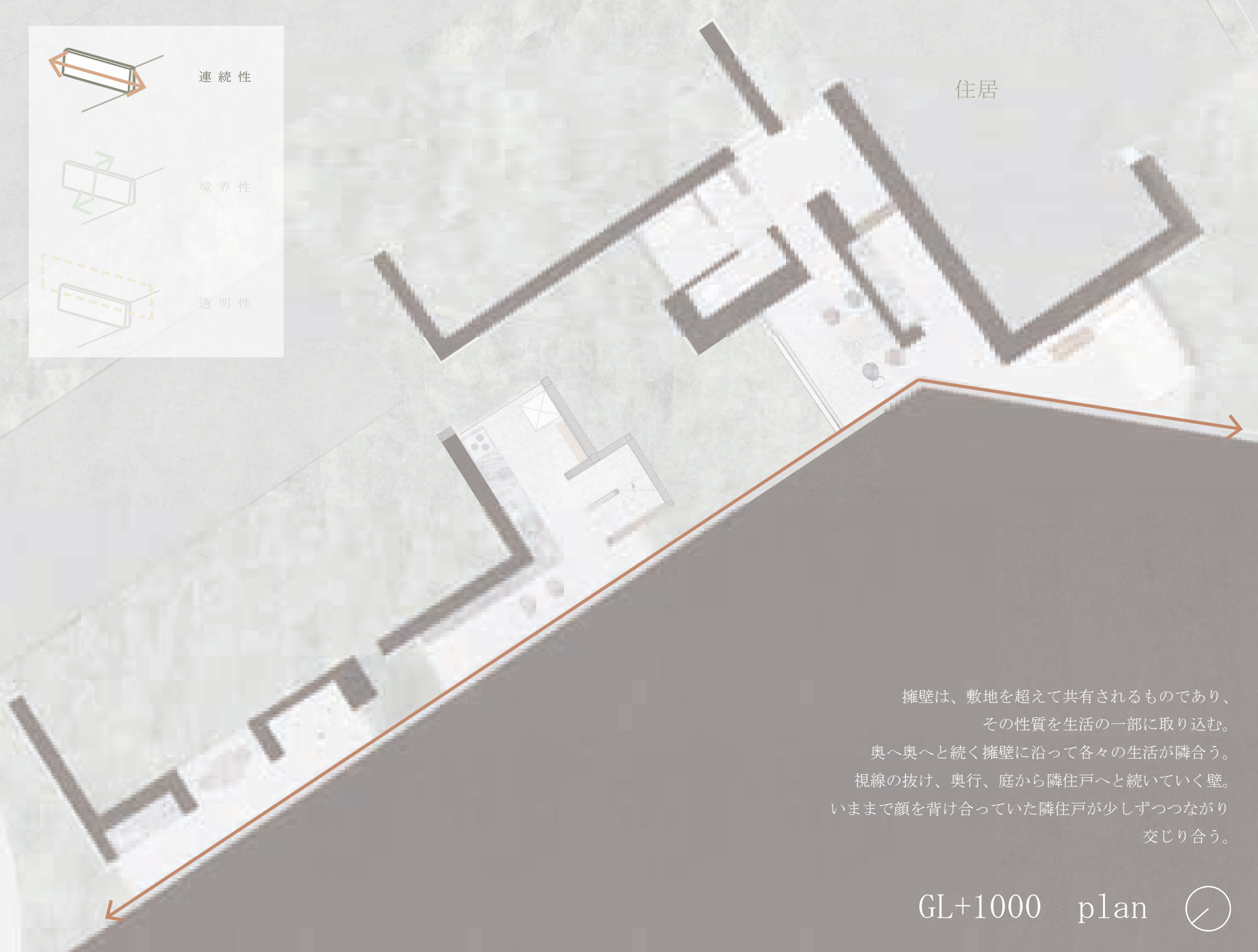
GL+5000 plan



GL+9000 plan

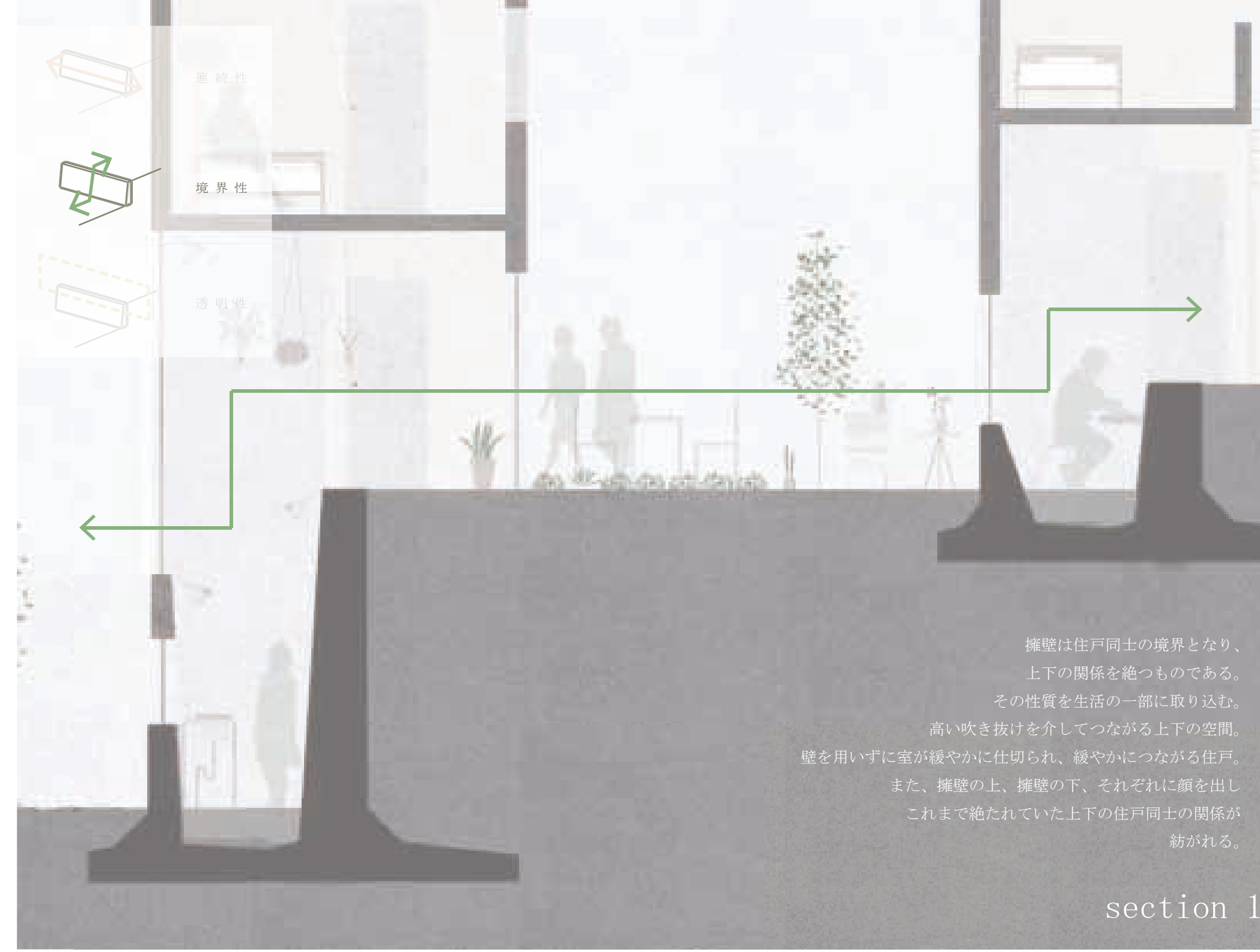


GL+11000 plan



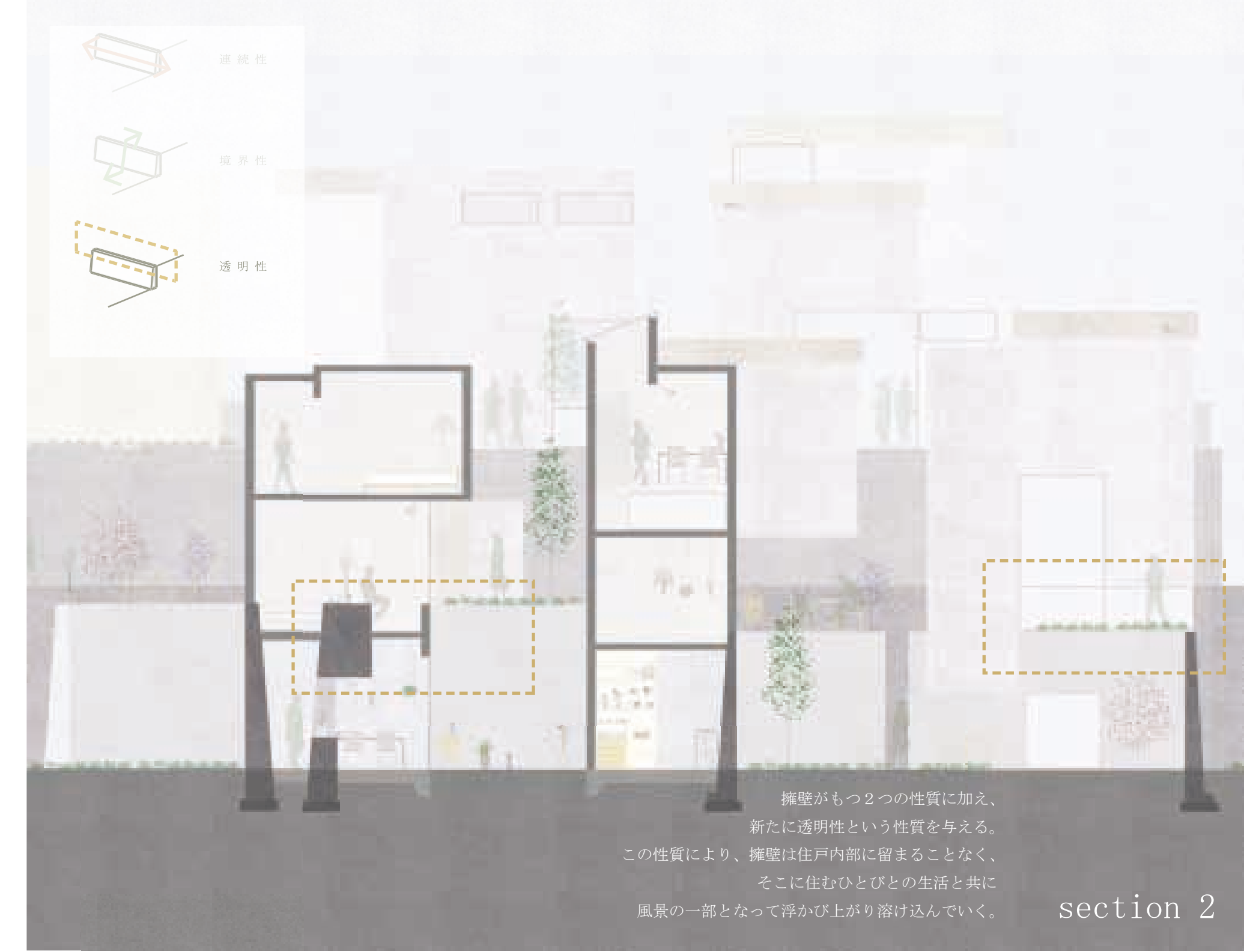
擁壁は、敷地を超えて共有されるものであり、
その性質を生活の一部に取り込む。
奥へ奥へと続く擁壁に沿って各々の生活が隣合う。
視線の抜け、奥行、庭から隣住戸へと続いていく壁。
いままで顔を背け合っていた隣住戸が少しずつつながり
交じり合う。

GL+1000 plan



擁壁は住戸同士の境界となり、
上下の関係を絶つものである。
その性質を生活の一部に取り込む。
高い吹き抜けを介してつながる上下の空間。
壁を用いずに室が緩やかに仕切られ、緩やかにつながる住戸。
また、擁壁の上、擁壁の下、それぞれに顔を出し
これまで絶たれていた上下の住戸同士の関係が
紡がれる。

section 1



擁壁がもつ2つの性質に加え、
新たに透明性という性質を与える。
この性質により、擁壁は住戸内部に留まることなく、
そこに住むひとびとの生活と共に
風景の一部となって浮かび上がり溶け込んでいく。

section 2